

点眼手技習得困難患者への点眼自助具を用いた指導の効果について

キーワード 点眼手技 自助具

○野田佳史（中 3 階病棟）

I. はじめに

近年、眼科領域における医療技術の高度化により、手術侵襲の減少や在院日数の短縮がなされている。当病棟では白内障患者に対し片眼 3 泊 4 日、両眼 7 泊 8 日の入院による手術が行われており、患者の多くは術後 2 日目に退院する。眼科領域の疾病と治療は患者の QOL に直結しており、特に手術療法の場合、術後の感染予防上、継続的な点眼治療が必要不可欠である。そのため、患者は短い入院期間内で点眼手技を習得しなければならないが、入院患者の多くが高齢者であり入院期間中に点眼手技を習得できずに退院する患者も少なくない。実際、当病棟の平成 23 年 4 月～6 月における眼科入院患者の 20%が退院時の点眼手技 1 段階（看護師が患者に点眼をする）、23%が点眼 2 段階（看護師見守りにて患者が自己点眼する）であり、退院時に点眼手技を習得できているものは全体の 57%と、約半数の患者が入院期間中に点眼手技を習得できずに退院している現状にある。点眼手技習得困難な患者の中には、繰り返し指導をしても点眼瓶の固定が不十分なため点眼瓶の先が睫毛や眼球に触れそうになるものや、点眼時の位置決めができず眼内に滴下できないものも多い。そのため、点眼の内容・順番を理解していても手技の面で習得できない患者も多く、なかには上手に点眼出来ないという理由から看護師に依存的な患者もいる。本研究ではそのような点眼手技習得困難な患者に対して、新たに点眼自助具を用いて点眼指導を行い、点眼手技の習得および患者の自立に有効であるか検討した。

II. 用語の定義

1. 点眼段階：当病棟で使われている点眼手技のスケール。看護師が患者に点眼するものを 1 段階、看護師見守りにて患者が自己点眼するものを 2 段階、患者が自己管理・自立して点眼するものを 3 段階とする。
2. 点眼手技：点眼瓶の固定が出来る、点眼瓶の先が目につかない、眼の中に滴下できるの 3 項目が出来ることとする。
3. 点眼自助具：点眼時に用いる福祉用具。本研究ではカワモト社の「ニューらくらく点眼」を用いるとする。

III. 研究方法

1. 研究対象

平成 23 年 9 月～12 月で両白内障手術または硝

子体手術を受け、手技面で点眼習得が困難な患者 6 名。認知症など理解力に問題のない患者とする。対象の内訳は次頁の表 1 の通りである。

表 1 対象患者の内訳

	性別	年代	疾患	患者背景
A 氏	女性	70 歳代	両白内障	ADL 自立
B 氏	女性	60 歳代	右白内障 左硝子体	ADL 自立、透析患者 元看護師
C 氏	男性	60 歳代	左硝子体	ADL 自立
D 氏	女性	60 歳代	両白内障	ADL 自立
E 氏	女性	80 歳代	両白内障	透析患者、付き添い 杖歩行
F 氏	男性	60 歳代	両白内障	脳梗塞既往、付き添い 杖歩行、透析患者

2. 研究方法

本研究に同意の得られた対象患者に点眼自助具（ニューらくらく点眼）を使用する。点眼瓶の固定が出来る・点眼瓶の先が目につかない・眼の中に滴下できるの 3 項目を、ひとりで出来る（○）、見守りで出来る（△）で評価し、また使用時の患者の反応、使用前後の点眼手技の状況をフローシートに記載していく。

3. データ分析方法

使用時の患者の反応・点眼手技の状況を記載したフローシート、看護記録から患者の点眼習得・自立に対して有効であったか分析・検討する。

IV. 倫理的配慮

研究の主旨を患者に説明し、プライバシーの配慮、情報は研究以外の目的で使用しないこと、研究への協力を拒否しても不利益が生じないことを、書面を用いて説明し同意を得た。また、看護倫理委員会の審査を受け、承認の判定を得た。

V. 結果

1. A 氏の場合

点眼手技状況	開始時	退院時
点眼瓶の固定ができる	△	—
点眼瓶の先が目につかない	△	—
眼の中に滴下できる	△	—
点眼手技段階	2 段階	2 段階

A 氏は点眼時の位置決め・固定ができず点眼瓶がずれて眼内に滴下できないため、自助具による

指導を開始した。自助具の固定と眼内に滴下がしやすいように、臥位による指導をスタッフ間で統一して行った。しかし、自助具のセッティングや固定はできるが、繰り返し指導をしても点眼時に閉眼する傾向にあり、自助具を固定しながら開眼することが困難なため途中で使用を中止した。

2. B 氏、C 氏、D 氏の場合

点眼手技状況	開始時	退院時
点眼瓶の固定ができる	△	○
点眼瓶の先が目につかない	△	○
眼の中に滴下できる	△	○
点眼手技段階	2 段階	3 段階

B 氏は上手に点眼できないという理由で目尻に点眼瓶をくっつけて点眼していたため、自助具による指導を開始した。B 氏は理解度が高いため、手技の指導と合わせて、点眼瓶の先端を清潔に保つ必要性についても指導を行った。B 氏より「看護師をしていたから、目薬の先に触れたらダメだと知っていたが、今までずっと上手にさせずに目尻にくっつけてさしていた。これ（自助具）を使うと、目薬の先が目につかないし、目薬の固定ができるので良い。退院後も使いたい。」と発言があり、自助具使用にて点眼瓶の先が目に触れることなく、点眼自己管理ができるようになった。

C 氏は元々、点眼自己管理できていたが、硝子体手術後の見えにくさから点眼瓶の位置決めができず上手に眼内に滴下できずにいた。C 氏は自己管理したいという思いが強く、術後早期より自己管理できるよう自助具使用による点眼指導を行った。「これ（自助具）を使えば、目が見えにくくても、ちゃんと目の中に目薬が入るからいい。」と発言があり、目の見えにくさはあるも術後早期より点眼自己管理できるようになった。

D 氏は入院前より家族が点眼しており、自己点眼時は点眼瓶の固定ができず、眼と点眼瓶の距離が近く、点眼瓶の先が目につきそうであった。これまで自己点眼する習慣があまりなかったとのことで、自助具を固定しやすいよう臥位での指導を行った。「これ（自助具）を使わなくても、できるようになった。前は位置がわからなくて、いろんなところに目薬が落ちていたけど、これ（自助具）で練習したから、位置がわかるようになったのかな。」と発言あり、自助具使用にて眼と点眼瓶の距離感や滴下位置の感覚をつかむことができ、退院時には自助具を使わず点眼自己管理ができるようになった。

3. E 氏の場合

点眼手技状況	開始時	退院時
点眼瓶の固定ができる	△	△
点眼瓶の先が目につかない	△	○
眼の中に滴下できる	△	△
点眼手技段階	1 段階	2 段階

E 氏は点眼瓶の固定ができず目に突き刺しそうであり、高齢なため 1 段階にて点眼介助を行っていた。しかし、家族より自分で点眼できるようになってほしいと要望があり、患者だけでなく家族への指導も行い、自助具での点眼指導をおこなった。E 氏は高齢であり、頸部後屈が難しいため臥位での指導を行い、また透析患者で他患者と比べ点眼練習する回数が少ない分、できる限り点眼時に家族も一緒に参加してもらうよう調整をした。開始時「難しい。目薬をしてください。」と医療者に対し、依存的発言が見られたが、入院期間中に家族の見守り・指導の下、自助具を使いながら点眼練習する姿がたびたび見られた。退院時には一つ一つの動作はゆっくりであるが見守りにて点眼できるようになった。

4. F 氏の場合

点眼手技状況	開始時	退院時
点眼瓶の固定ができる	△	○
点眼瓶の先が目につかない	△	○
眼の中に滴下できる	△	△
点眼手技段階	1 段階	2 段階

F 氏は白内障手術後の見えにくさ、脳梗塞後遺症による手先の巧緻性低下があり点眼瓶の位置決め・固定が不十分なため 1 段階にて点眼介助していた。しかし、患者は独居であり、退院後の自己管理に向けて点眼自助具による点眼指導を開始した。F 氏は透析患者であり他患者と比べ、点眼練習する回数が少ないため、点眼練習する際は必ず看護師と一緒に練習するようにした。使用前は医療者にやや任せきりなところがあったが、自助具使用後は「ひとりだから、自分でしなくちゃね。」と、意欲的に点眼練習に取り組み、眼内に滴下にできるのに何滴かかかるも、退院時には見守りで点眼できるようになった。

VI. 考察

今回、研究対象者 6 名中、退院時まで自助具を使用したのは 5 名であり、途中で自助具使用を中止したのは 1 名であった。また、退院時まで自助具を使用した患者 5 名とも開始時に比べて、退院

時の点眼手技段階の上昇がみられ、入院中の点眼練習にて在宅時よりも点眼手技が上達していることがわかる。

退院時まで自助具を使用した患者 5 名を患者背景でみていくと、ADL の自立している B 氏、C 氏、D 氏 3 名とも開始時は点眼手技 2 段階であったが、数回の指導にて自助具使用方法を習得し、退院時には点眼手技 3 段階で自己管理できるようになった。自助具を使用した B 氏、C 氏、D 氏より「点眼瓶の先が目につかず、点眼瓶の固定ができるので良い。」「目が見えにくくても点眼が出来る。」「自助具使用にて目薬と目の距離感がつかめるようになった。」と反応があり、自助具使用にて点眼瓶の固定が補助され、点眼瓶が目に触れることなく点眼できること、また点眼瓶と目との距離感をつかむことに効果があることが考えられる。

ADL に介助を要する E 氏、F 氏は、2 名とも入院時は点眼手技 1 段階であったが、退院時は点眼手技 2 段階で点眼できるようになった。両氏とも、加齢や既往症による手先の巧緻性の低下があり、点眼瓶の固定ができず眼内に滴下することが困難であったが、自助具による指導を繰り返し行い、退院時は一つ一つの動作が緩慢で眼内に滴下するのに何度かかかるが、見守りのもと点眼ができるようになった。

また両氏とも、入院時は点眼に関して医療者にやや依存的であったが、自助具を使用するにつれて、点眼の自立に関する発言や自助具を使って点眼練習をする姿が見られた。これは先行研究において中村らが「生活の自立を高めるために障害に応じた用具や器具を活用し、自立できる環境を整えることが重要である。¹⁾」「人は高齢になって体力が衰えても、自分のことは自分でやりたいと思うものである。これは人間として生きるための自然な要求である。²⁾」と述べているように、自助具を活用し、できない部分を補うことで患者の自立を助け、自分のことは自分でしたいという要求を満たすことに繋がったのではないかと考える。

しかし、自助具使用の課題として、自助具は点眼瓶の固定や位置決めを補助するものであり、A 氏のように点眼時に閉眼してしまう患者では適さない。また、使用する患者の運動機能に左右されるため、患者の点眼手技において何が問題なのか、自助具の適応なのかをアセスメントする必要がある。また術後、複数の点眼薬を滴下するのに、点眼薬を変えるたびに自助具の取り外しをする作業が必要なため、患者のキャラクターや点眼に対するコンプライアンスを考慮する必要がある、自助具使用についての課題も多い。

しかしそれ以上に、今回の研究では自助具を用

いた指導前後での患者の点眼手技の変化や、自助具に関して患者からの肯定的な評価が得られた。

また、先行研究において、大味らが「高齢者の点眼手技が自立できない要因として加齢による運動機能低下や末梢神経の衰えから手指がなめらかに動かず、素材が堅い点眼瓶を押す際の位置のずれがみられる。³⁾」と述べており、高齢の患者にとって点眼とは手先の巧緻性を必要とする細かい作業であり、その細かい作業、特に点眼瓶の固定や位置決めを自助具にて補助してあげることが、患者の点眼手技習得に有効であると言えるだろう。

VII. 結論

1. 点眼瓶の固定、位置決めが不十分な患者に自助具を用いて点眼指導することで、点眼手技の習得に効果がある。
2. 運動機能の低下がある患者であっても、患者の点眼の問題点をアセスメントし、必要に応じ自助具を用いた点眼指導を行うことで、自己点眼への意欲上昇や点眼手技の上達につながる。

VIII. 終わりに

本研究は対象者が 6 名と少数例からの研究であり、研究仮説を断定することが難しいが、今回の研究を通して、点眼手技習得困難患者に対する看護を見直すきっかけとなった。

今後の課題として、入院時や術後早期より患者の点眼手技の状況をアセスメントし、患者に応じた点眼方法の選択や、必要に応じて福祉用具を取り入れた介入、そして、患者に統一した点眼指導が行えるようスタッフ間の連携や看護ケアの充実が必要であると考えます。

引用文献

- 1) 中村明世・伊藤和美：フローチャート導入による点眼方法の選択と点眼手技の獲得 日本看護学会論文集 第 37 回 成人看護Ⅱ 292-294 2006
- 2) 1) 再掲
- 3) 大味和恵・黒田正子：老年性白内障患者の点眼指導後の自立に影響を及ぼす要因 日本看護学会論文集 第 33 回 成人看護Ⅱ 159-161 2002

参考資料①

点眼手技フローシート（看護研究用）

患者様氏名 _____ 年齢 _____ 性別 _____ 疾患 _____ 術式 _____

○ ひとりで出来る △ 見守りにて出来る

日付	月 日						月 日						月 日					
時間	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時
点眼瓶の固定が出来る																		
点眼瓶の先が目につかない																		
眼の中に滴下できる																		
患者様の反応・言動 点眼手技の状況 スタッフの考察 (S.O 形式)																		
看護師サイン欄																		

参考資料②

カフモート

NEW

ニュー

らくらく

点眼

処方薬・市販薬どちらにも使える
点眼補助具

点眼補助具です
どなたでも簡単に点眼できます

- 処方薬・市販薬どちらにも使える点眼補助具です。
- 点眼瓶の位置が固定されるので、誰でも簡単に点眼できます。

● 使用例



市販薬装着例



処方薬装着例

① 点眼瓶のキャップをはずし、下図のようにらくらく点眼を差し込みます。



② らくらく点眼と点眼瓶を両手でしっかりまなながら顔を上げ、らくらく点眼と顔が直角になるよう固定します。アゴと顔を水平にし、点眼します。



※ らくらく点眼の差し込み部分と点眼瓶の口がしっかり固定です。ゆるい場合もございますので、必ず両手でまなでご使用ください。

注）ほとんどの点眼瓶に対応できますが、一部対応できない容器があります。